

環境と建築 リノベーションによる駅ビルの再解釈

1889年（明治22年）静岡駅が開業し、今年で127年が経とうとしています。駅舎の建替え、線路の高架化など時代とともに変貌をとげながら、静岡市の交通の拠点として機能し続けています。

現在では、当たり前のように存在し、多くの人々が利用する静岡駅ですが、開業当時に市民が得た公共空間の意味はどのようなものであったか、新たな交通手段は人々の心や街の活性化にどのように働きかけていたのか、その様子を思い起こすことが時代と共に難しくなっているのかも知れません。

静岡駅の顔としてそびえ立つパルシェも開業から35年を迎えます。第2次オイルショック直後から怒涛のバブル景気、そして崩壊、昭和から平成へと時代は流れ、パルシェが見守ってきた静岡市は年月とともに変貌し続けています。

現在、駅・駅ビルをどんな場として捉えているでしょうか。社会・市民にとってどんな存在であるべきか。観光に訪れた人々にどんな印象を残すのか。パルシェが開業当時とは明らかに違う社会・時代からの要求に対し、現代の公共性ともいうべき、新たな可能性に想像を巡らせ、一つの解答を得られたらと考え、提案させていただきます。



パルシェ (PARCHE) について

■沿革

静岡駅は1889年（明治22年）2月1日に官設鉄道の駅として開業し、1907年（明治40年）に2代目の駅舎、1935年（昭和10年）に現在の駅舎の原型となり、改修を経て現在の駅の姿となりました。

静岡駅の開業から91年を経て、駅の高架化が完了するとともに、パルシェ（1981年10月8日（昭和56年）開業）が建設されました。1日平均乗車数は57,924人（2014年）を誇り、多くの人びとが行き交う静岡市の中心として、現在に至ります。



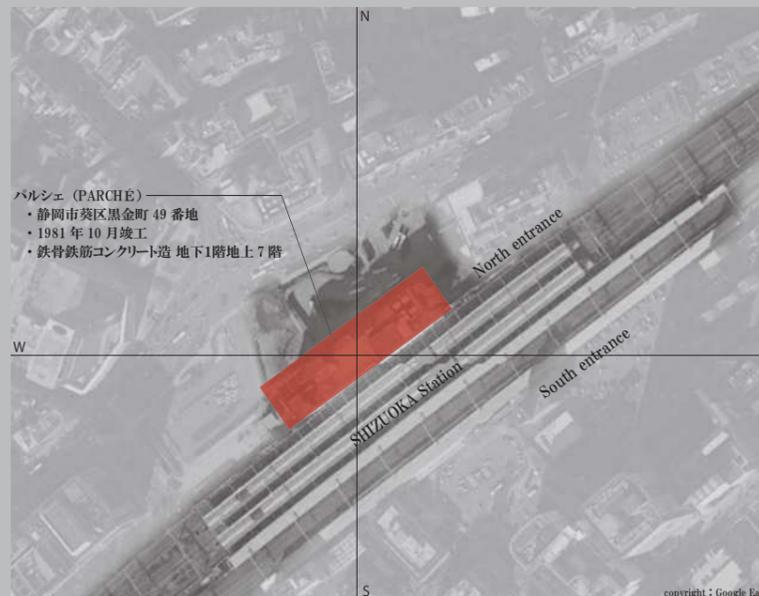
■公共的空間 / 求められる駅ビル空間

パルシェ竣工当時の都市は、インフラや機能成立のための整備が重要課題でした。しかし、現在の静岡市は機能するための整備は整い、安定・縮小の時代へと移行しています。そんな社会の大きな変化は都市における公共空間の変化も要求していると考えます。

駅ビルはどんな場であるべきか。そこはやはり使いやすく、居心地が良い空間であり日常生活リズムの中に溶け込んだ、親しみある場であるべきと考えます。また、旅行者にとっては静岡の印象を深く刻み、強く静岡を感じる場であることが理想ではないでしょうか。



MAPPING / 敷地状況



既存計画における改善点・問題点の抽出

1. コンコース空間



駅機能へと引き入れる空間としての華やかさ、居場所としての多様な空間が求められる。また、外部を感じない閉塞感、旅行者が訪れた際に、静岡市に降り立った感覚が生まれず、他都市のそれと変わらぬ印象を受け、旅の高揚が薄れてしまう。

2. ファサード



特徴的なファサードで静岡市の顔となってきたが、街へと向けた開口が少なく、圧迫感の強い印象を受ける。中での活動、賑わいが閉じ込められ都市との関係が遮断されている。屋上のビアガーデンの賑わいが都市へ溢れる感覚を建物全体で計画すべきだと考える。

3. バス乗場庇



バス乗り場としての機能的な能力に長けた計画となっているが、コンコースを抜けた先の街の風景が庇によって隠され、駅を出た時の第一印象として目に飛び込んで来てしまう。

4. 前面空間

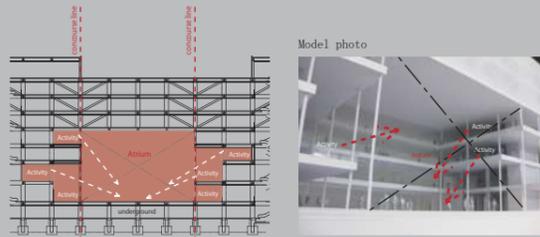


地上から地下へのアクセスとして、特徴的な屋根がデザインされ洗練された空間となっているが、コンコース出口からのアクセス空間はバスの乗り合い空間と重なり、アクセス空間の伸びやかさが生かされていないように感じる。

提案手法 1 / 都市・人々を受入れる吹抜空間

- ・ゲートとしての役割
- ・活動が巻き上がる多様な空間
- ・都市空間との連続

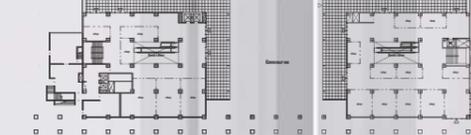
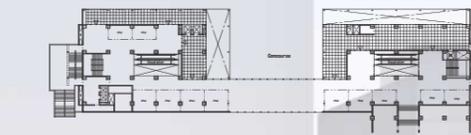
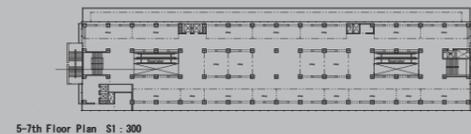
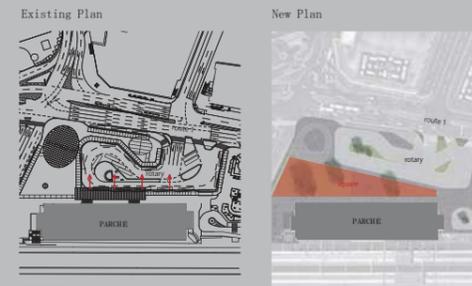
既存のコンコース分のスパンを4層目までの吹抜空間として計画します。都市空間から連続する大きな吹き抜け空間は、駅を訪れる人、あるいは駅から街へと向かう人にとって特徴的なゲートとして機能します。また、吹抜空間の両側には内部空間から連続的に計画したテラス空間が積層され、人々の活動が巻き上がった空間、人々の賑わいに包まれたゲートとして計画しています。



提案手法 3 / 既存動線との連携・前面広場

- ・前面広場の創出 / バス乗場のセットバック
- ・既存動線との連携 / 通行と滞留
- ・緑空間の演出

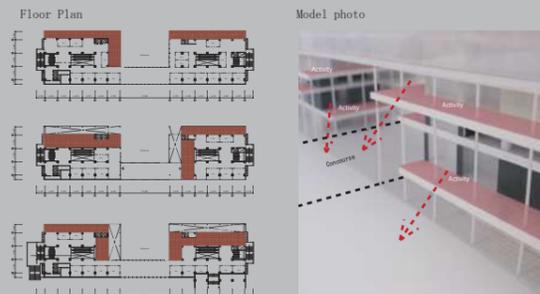
既存のバスロータリーの機能を維持したまま北側へとセットバックさせ、コンコース出口に前面広場を計画します。出口を出た時に広がる都市への視野を獲得するとともに、既存の地下へのアクセス空間へと円滑に接続します。計画された広場には緑を配し、公園のような空間性を獲得しながら人々の居場所を演出します。既存の動線計画・人々の流れをそのままに環境的な計画によって都市との繋がりを創出しています。



提案手法 2 / 活動がファサードとなるテラス空間

- ・奥行きのあるファサード
- ・活動、賑わいが溢れる外部テラス
- ・都市空間との連続

既存空間では外部との繋がりが遮断され、建物内へと閉じ込められていた活動・賑わいを外部へと露出させます。人々の活動が積層されたファサードを計画する手法として、吹抜を介しながら連続する外部テラス空間を提案します。都市空間と連続するこの空間は、賑わいが都市へと溢れ出ていく感覚を創出します。温暖な静岡の気候が人々の居場所を外部へと導きます。



提案手法 4 / 構造計画

- ・スーパーストラクチャー的発想
- ・増床空間
- ・既存縦動線の維持

大きな吹き抜けという構造的に不利な計画をスーパーストラクチャー的な発想により解決します。吹抜上部(5~7層)部分を一体の構造と捉え、鉄骨ブレースを配置することにより剛性を高め一本の大きな梁のように機能させます。増床部分は新規の柱、既存の躯体への貫通ボルト固定で支持し、既存の縦動線の位置を維持する計画とすることで床面での水平剛性、地震時の局所的な応力集中を避けた計画としています。

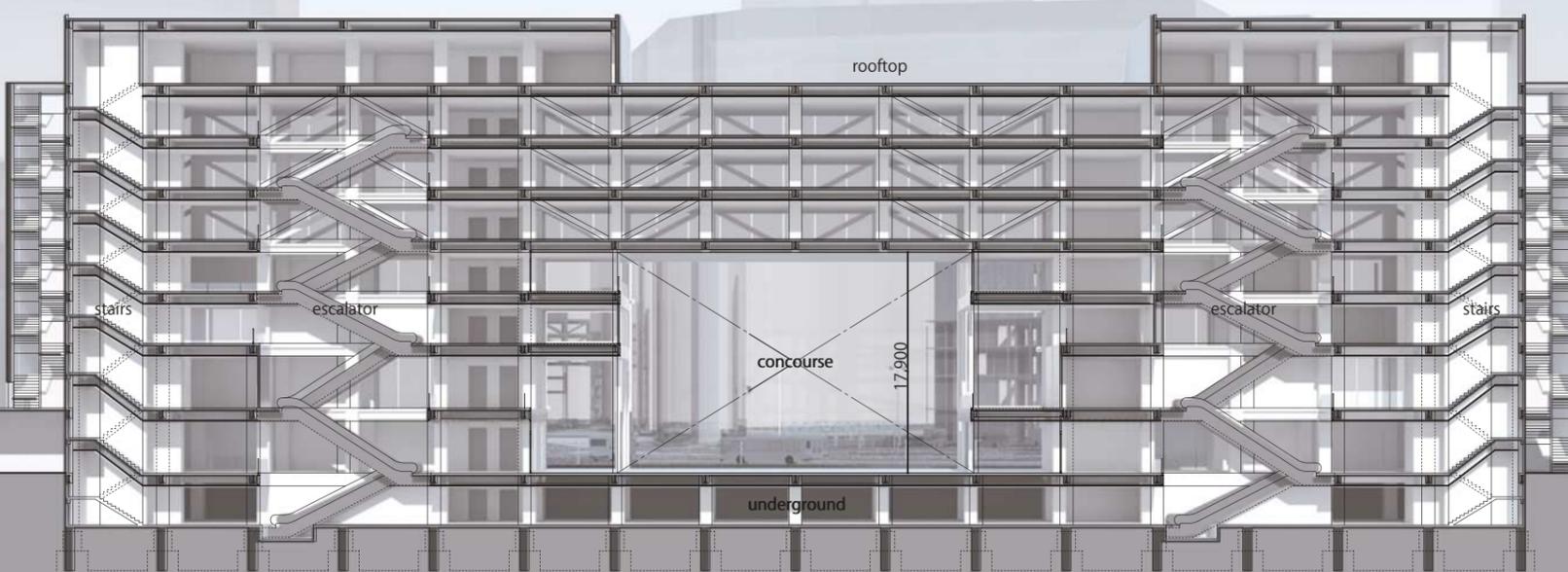
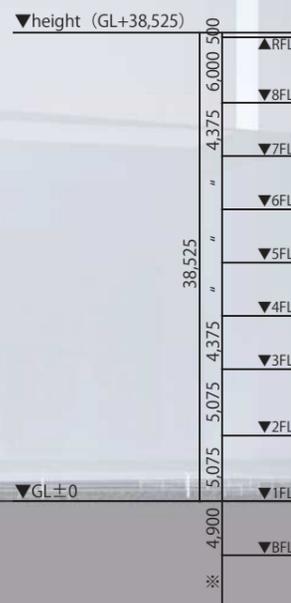
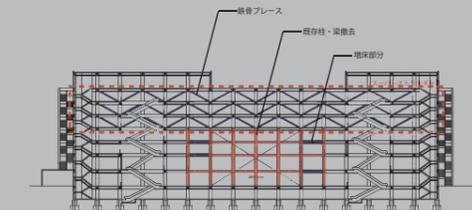


Image Perspective : 吹抜空間



Image Perspective : テラス空間



Image Perspective : ファサード